

『先進繡像玉石雜誌』の研究―兼好伝の位相を中心に―

島内裕子¹⁾

要旨

『先進繡像玉石雜誌』は、江戸時代後期の有職故実家・栗原信充（一七九四～一八七〇）が著した、肖像画付きの人物列伝で、天保十四年（一八四三）に刊行された。正編は九巻からなり、北畠親房から藤原為子に至る二十四人を取り上げている。各人物の肖像だけでなく、遺愛の品々、短冊・色紙、ゆかりの場所や合戦図などの図版も豊富である。掲載されている人物は、南北朝時代の政治の激動に直接関与した、貴族や武将たちがほとんどである。本稿では、『先進繡像玉石雜誌』の中に、『徒然草』の著者である兼好が入っていることに着目し、主として次の二つの観点から考察した。

第一に、なぜ、政治の舞台でこれと目立って目立つた役割を担ったわけでもない、文学者の兼好に関する記述が、歴史上著名な他の人物たちと比べても遜色なく、詳しく書かれているのか。第二に、江戸時代に刊行された『扶桑隱逸伝』や『前賢故実』のような、肖像画付き人物伝に掲載されている兼好の紹介記事と比べて、栗原信充の兼好に対する人物評価には、どのような特徴があるのか。

第一の観点については、江戸時代に書かれた、創作的な兼好伝（兼好の実伝ではなく、虚構を含む物語的な伝記）の蓄積を、栗原信充は資料として活用しつつ、それらを集約しさらには、栗原信充独自の实地調査による、聞き書きも行われていたことが明らかになった。また、第二の観点からの考察によって、栗原信充の兼好に対する人物評価が、近代に入って以降、明治・大正期の兼好観にも影響を及ぼしていることがわかった。

はじめに

『先進繡像玉石雜誌』は、栗原信充¹⁾（一七九四～一八七〇）が著した肖像画付きの人物列伝で、天保十四年（一八四三）の刊行である。九巻からなり、北畠親房から藤原為子にいたる二十四人を取り上げている。ほとんどの人物は、南北朝時代の政治に直接かかわった貴族や武将たちであるが、『徒然草』の著者である兼好も入っている。『先進繡像玉石雜誌』には、各人物の肖像だけでなく、遺愛の品々、短冊・色紙、家屋の平面図や広域地図など、多数の絵図資料も掲載されていることが、注目される。今回、考察の対象とするのは九巻からなる正編で、

この他に続編もある。¹⁾

栗原信充は、江戸時代後期から明治初頭にかけて、政治や社会が激変する時代を生きた有職故実家で、幕臣である。屋代弘賢に有職故実を学び、弘賢が中心となって編纂した『古今要覧稿』編集の一員となった。また、薩摩藩の島津久光の知遇を得て鹿児島に赴き、久光に軍学を講じたり、当地で有職故実を教授して弟子たちも育てた。『国書総目録』の著者別索引には、百三十余種の著作が見える。それらは武器・武鑑・制度・陵墓・寺社・神仙方術・楽器・古器・地誌・随筆など、多岐にわたっている。

この伝記集『先進繡像玉石雜誌』に掲載されている兼好に関する絵図資料は、『徒然草』研究史の中で、今までも多少は触れられてきたが、最近『先進繡像玉石雜誌』の版本を入手したこともあり、江戸時代における数々の兼好伝記の一例として研究する次第である。兼好は、南北朝時代の政治の舞台で特に目立つ役割を担ったわけでもなく、また、『太平記』や洞院公賢の漢文日記『園太暦』にわずかに登場する以外には、種々の記録や歴史書などにその事跡が書かれているわけでもない。ただし、江戸時代の『徒然草』人気に伴い、創作的な兼好の伝記が種々出版されていることは注目に値する。わたくしは、それらを「近世兼好伝」と命名して、以前から研究してきた。そのような経緯を踏まえて、この『先進繡像玉石雜誌』に掲載されている兼好の記事や絵図資料が、どのような位相を持つかという点に、今回のテーマを置いた。なお、『先進繡像玉石雜誌』の本文と図版は架蔵本によるが、『日本随筆大成 新装版（第二期）』9（吉川弘文館、平成六年）の翻刻版も適宜、参照した。

一 『先進繡像玉石雜誌』の構成と概要

ある一人の人物の伝記ではなく、何人もの略伝を集めた人物小伝集は、古くか

らあり、その際には、何らかの共通項を立てて人物伝をまとめることが多い。たとえば、『本朝神仙伝』（成立未詳、大江匡房「一〇四一〜一一一一」編）のような仙人たちの伝記集や、『元亨釈書』（虎関師錬、一三三二年）のような高僧伝、『女院小伝』（成立・編者未詳）のような、平安時代から南北朝までの女院の略伝などがある。

江戸時代に入ると、『本朝遼史』（林読耕斎、一六六四年、五十一人、小伝は漢文体）や『扶桑隱逸伝』（元政、一六六四年、七十五人、賛・肖像付き）などのような隠遁者列伝、『日本古今人物史』（一六六九年、古代から近世の分野別、二百人余り、小伝は漢文体）や『日本諸家人物誌』（一七九二年、近世中期の人物の分野別、三百人余り）などのような人物事典的なもの、『先哲叢談』（原念斎、前編一八一六年、七十二人。東条琴台、後編一八三〇年、七十二人）や『先哲像伝』（原徳斎、一八四四年、二十人、肖像と筆跡付き）のような儒学者たちの小伝集、『前賢故実』（菊池容斎、一八三六〜一八六八年、五百人余り、肖像付き、小伝は漢文体）のような伝記集がまとめられた。

本稿のテーマである『先進繡像玉石雜誌』（一八四三年）も、このような江戸時代の伝記集の広がりの中にある。兼好のことが掲載されていること、肖像入りであること、評言があることなどに注目すれば、『扶桑隱逸伝』『前賢故実』との共通性がある。

まずはその書名であるが、「先進」は優れている意、「繡像」は刺繍で描いた肖像が原義であるが、後に画像の意ともなり、ここでは人物の肖像画付きであることを示す。「雑誌」は、種々雑多なことが記載されている書物のこと。書名の中で使われている「玉石」は、玉石混淆の意が連想されるが、一般に人物伝は、ある分野で優れた人々を取り上げているので、それをわざわざ玉石混淆でまとめるというのやや不審ではある。ちなみに、『先進繡像玉石雜誌』（以下、『玉石雜誌』と略称する）に先立って、滝沢馬琴の『燕石雜志』（一八一一年刊）という題名の書物がある。栗原信充が書名に込めた思いについては、後述する『玉石雜誌』の自序の部分で、触れることにしたい。

まず最初に、『玉石雜誌』に掲載されている人物を、各巻毎に順に示そう。その際に、人物名は目録の人名表記ではなく通行の名前による。通し番号を付け、括弧の中に生没年や補足説明などを簡略に添えた。記述の分量は、ある程度人物評価の軽重を反映していると考えられるので、各人物の記述の丁数を示して粗密の目安とした。各巻とも目録の丁数を除いて、本文の丁数は三十丁前後である。掲載人数はまちまちであり、一巻の全体を一人の人物に充てている場合もある。

各巻とも、まず肖像画が半丁のスペースに描かれ、背景は描かれない。ちなみに、『扶桑隱逸伝』の肖像画は、室内や庵や戸外など、場所を示すさまざまな光景の中に描かれ、構図自体が、その人物を象徴している。また、『前賢故実』では、馬に乗って疾走したり、弓を引き絞る武者姿がリアルに描かれ、躍動感に溢れるダイナミックな構図が多い。『玉石雜誌』では肖像画に続いて、漢字平仮名交じりの和文体で伝記が書かれる。漢字は総ルビである。伝記の記述の途中に適宜、図版が入る。伝記の末尾には、その人物に対する栗原信充の評言が書かれることが多い。

【巻第一（二名掲載）】

①北島親房（一二九三〜一三五四、肖像画は、出家前と出家後の二図、十五丁半）

②楠木正成（？〜一三三六、二十一丁）

この巻では、一丁表に次のような自序が入っている。句読点は私意に付した。

余、韶齋より、文武聞人達士奇伎名工の名を集録することを好み、長ずるに及て、系譜に就て、年齒行状生卒を劄記し、又肖像墨蹟より其遺愛の器械を写真し、籠中に収め、時々牀頭に貼着し焚燻して其高風余韻を歆羨し、其胸襟心情を追慕すること久し。是歳秋、尚友堂岡村生、川尻氏を介して、余家に来り、梨棗に寿せんと云。孟子の所謂一郷の善士の天下の善士を友として足らず、古の人を尚論すと云を学ばんことには非ず。たゞ小兒輩、温故の階梯ともならば幸甚と云。柳菴陳人栗原信充誌

栗原信充自身によるこの序によれば、信充は「韶齋」すなわち、齒の抜け替わる年頃の子どもの頃から、文人武人を問わず、著名な人物や素晴らしい技術を持った名工の事跡をいろいろな書物などから抜き書きして収集し、肖像画や筆跡や遺愛の品々を書き写しては、竹で編んだ背の高い「籠」という箱に入れ、時々、それらを枕辺に掲げて薫き物を焚いて、古人たちのすぐれた人格や技術、また古人たちの胸の内や心の内を慕う気持ちが強かった。そうこうするうちに、今年秋に、尚友堂が我が家にやって来て、ぜひ出版したいとのことなので、若い人たちが昔のことを学ぶ手引きとなれば幸いであると答えて、本書が出版の運びとなったと言う。

この中で、とりわけ重要と思われるのは、「小兒輩、温故の階梯ともならば」

の部分である。このような表現は、自著に対する謙遜でもあろうが、著者の栗原信充は、若年者たちへの啓蒙的な出版物としての役割を意識している。そのうえで、優れた手本となる人物だけではなく、よくない例も挙げることによって、いわゆる玉石混交の中から、玉と石を分別しながら読む姿勢も育てようとしているのではないか。そうであるならば、『玉石雜誌』の「玉石」は、あえて玉石混交を意図したとも考えられる。

巻第一でまず北畠親房と楠木正成の二人を掲げているのは、後醍醐天皇の南朝方の忠臣たちの事跡を記すのが、『玉石雜誌』の真髓であることを示していよう。

【巻第二（五名掲載）】

- ③ 藤原藤房（一二九五～？、後醍醐天皇の側近、後に出家隠遁。八丁半）
- ④ 吉田定房（一二七四～一三三八、鎌倉方や北朝と通じたが最後は吉野で歿す。七丁）
- ⑤ 菊池武時（一二九二～一三三三、肥後の豪族、南朝方の有力武将。五丁）
- ⑥ 大坪有成（？～？、武家故実家、鞍鎧制作者。三丁）
- ⑦ 頼阿（一二八九～一三七二、二条派の歌人、和歌四天王の一人。八丁）

巻第二の五名の中に、歌人の頼阿が入っていることが注目される。③の藤原（万里小路）藤房と④の吉田定房の二人は後醍醐天皇の寵臣、⑤と⑥は出家後それぞれ寂阿、道禪と名乗る。この四人は南北朝時代の戦乱の中で、存在感が大きい。それに対して⑦の頼阿は、当時の歌人として、南北両朝と交流が深く、二条派歌人として、勅撰和歌集の撰者にも加わるなど、文化人として、大きな役割を果たしたが、政治的な役割を果たしたわけではなく、そのような記述も、ここにはない。伝記の末尾は、頼阿遺愛の尺八の伝来を記して締め括られている。

【巻第三（四名掲載）】

- ⑧ 岡崎正宗（？～？、鎌倉時代末期の刀工。十丁半）
- ⑨ 寛耀（俗姓未詳、画僧？、頼阿の『草庵集』に贈答歌あり。二丁）
- ⑩ 藤原（阿野）廉子（一三〇一～一三五九、新待賢門院、後醍醐天皇第六皇子恒良親王・第七皇子成良親王・第八皇子義良親王後に後村上天皇の母。十五丁）
- ⑪ 北条英時の妻赤橋氏（博多城での夫自害の知らせを受け、自らも自害。四丁）

女性が二人取り上げられている。⑩の藤原廉子は後醍醐天皇の三人の親王の

母、⑪の北条英時（？～一三三三）は鎮西探題。その妻の実家は赤橋家。二人の女性の立場は異なるが、激動の人生であった。

【巻第四（五名掲載）】

- ⑫ 土岐頼兼（後醍醐天皇の倒幕計画に⑬とともに参加、敗死。八丁）
- ⑬ 多治見国長（一二八九～一三二四、土岐頼兼の一族。七丁）
- ⑭ 中原章房（？～一三三〇、明法道の家柄。後醍醐天皇の決起を諫める。七丁）
- ⑮ 土岐頼春の妻斎藤氏（五丁）
- ⑯ 尊円（一二九八～一三五六、伏見天皇第六皇子、能書家、青蓮院流。六丁）

⑮の頼春の妻は、夫から聞いた謀反の話を実家に伝え、倒幕計画が露見した。栗原信充は、頼春夫婦の言動を厳しく非難している。「玉石」のうちの、「石」の実例として挙げたのである。

【巻第五（二名掲載）】

- ⑰ 名和長年（？～一三三六、伯耆の豪族。隠岐脱出の後醍醐天皇を迎える。二十丁）
- ⑱ 兼好（？～？、歌人、和歌四天王の一人。『徒然草』の著者。十九丁）

ここに、兼好が登場する。早くも巻第二で登場した頼阿は、兼好と同じく、和歌四天王の一人であるが、勅撰集の撰者にもなった。頼阿は、歌人としての経歴において、当時、兼好よりも遙かに大きな存在だった。けれども、兼好は頼阿の二倍以上の分量で詳しく記述されている。『玉石雜誌』における兼好に注目するゆえんでもある。

【巻第六（冒頭に川田興による「玉石雜志序」二丁あり。一名掲載。三十四丁。）】

- ⑲ 北条高時（一三〇三～一三三三、鎌倉幕府第十四代執権、新田義貞に攻められ自害）

巻第六は、北条高時のみで占められている。ここまでの『玉石雜誌』にはなかったことである。北条高時は貞時の嫡男。母は、秋田城介義景の二男大宝景村の長男泰宗の娘である。つまり、高時の母の曾祖父が、『徒然草』第百八十四段に登場する秋田城介義景であり、その義景の妹が松下禪尼である。

【巻第七(三名掲載)】

②〇円観(一二八一～一三五六、天台宗の僧。法勝寺住職、慧鎮。十六丁)

②①豊原龍秋(一二九一～一三六三、伶人。笙の家柄。『徒然草』にも登場。七丁)

②②日朗(一二四五～一三二〇、日蓮宗の僧。鎌倉比企谷に妙本寺建立。十三丁)

②〇の円観は兼好と同時代の天台僧。晩年は鎌倉下向し、宝戒寺を創建した。南北朝で重鎮となる。②①の龍秋は『徒然草』第二百十九段に登場する笙の楽人。『玉石雑誌』の龍秋の記事は、この段の記述をほぼそのまま引用するが、なぜか『徒然草』の書名は出していない。内容は、横笛の音階に関する故実記事である。横笛の図も掲載されている。龍秋に関するその他の記事は、康永四年の天龍寺供養に参加したことや、当日の参加者の氏名を多数列挙し、洞院実夏(公賢の次男)のことや、豊原家の楽統も詳述する。②②の日朗は、日蓮の六老僧の一人。

【巻第八(巻第八のみ二冊。上は三十丁、続いて下は六十丁まで)】

②③足利尊氏(一二三〇五～一三五八、丁数六十丁。『玉石雑誌』中、最も長い記述)

足利尊氏一名のみを、上下二冊で掲載する。肖像画は、出陣図・等持院・天龍寺の三図。このような例は、『玉石雑誌』全体を通して、他にない。

【巻第九(一名のみ掲載)】

②④藤原為子(父は歌人の二条為世、三十四丁)

為子所生の親王たちがそれぞれに、悲劇的な生涯であったことと、文武にすぐれていたことを語り、『玉石雑誌』の最後の巻を、為子にまつわる一巻として閉じた。

二 『玉石雑誌』における兼好伝の記述と『種生伝』

ここからは、『玉石雑誌』における兼好に関する記述内容を順に見てゆきたい。原文の引用に際しては、句読点を付した。冒頭は、「兼好法師は天児屋根命卅九代、従四位下右京大夫卜部宿彌兼名の長子兼頭の三男なり。兄を大僧正慈遍と云。南朝に伺候し、神風和記三巻を記せり。」とある。『神風和記』に割注を付けて、「桜雲記に、興国元年に撰進と見えたり。」と書いている。それに引き続い

て、「次は従五位上民部大輔兼雄なり。兼好、弘安五年壬申の歳、誕生あり。」と書き、生年については割注で「或云、弘安六年記癸未の歳なり」と記す。家系と兄弟と兼好の生年を簡潔に記す冒頭部である。

江戸時代には、『徒然草』の注釈書が数多く出版されており、それらの注釈書では多くの場合、冒頭に卜部家の系図を挙げるが、それぞれに多少の粗密がある。『玉石雑誌』は簡略な記述であるが、注目したいのは、系図を天児屋根命から書いていることと、そこから数えて三十九代が、兼好の祖父である兼名であるとしている。兼好の兄の大僧正慈遍が、南朝に仕えて『神風和記』(『豊葦原神風和記』三巻を著したこと、さらに割注で、『神風和記』のことは『桜雲記』に記されていることを付け加えているなど、南朝方の人物として兼好の兄を捉えている。

この後、兼好に関する記事のほとんどは、『種生伝』(一七一三年)を要約する形で書き綴られていることがわかったので、『玉石雑誌』の兼好記事と『種生伝』を比較検討するにあたっては、拙著『徒然草の変貌』(ぺりかん社、一九九二年)所収の「『種生伝』の翻刻と研究」によりながら、『玉石雑誌』が『種生伝』からどのように取捨選択しているかを示してゆきたい。

『種生伝』は、篠田厚敬によって書かれた創作的な「近世兼好伝」の一つで最も文学的な作品である。主として『兼好家集』と『徒然草』によりながら、兼好の生涯を誕生から終焉まで、和文体で書いている。ただし、『玉石雑誌』では、『種生伝』の冒頭で非常に詳しく書かれている卜部系図は、かなり簡略化している。拙著では『種生伝』を十三節に分けて、それぞれに小題を付けた。

『種生伝』の「①卜部氏系図」には、天御中主から始まる詳しい系図が書かれているが、『玉石雑誌』では、先に見たように、兼好の祖父から書いており、かなり簡略化されている。けれども、『徒然草』の注釈書を集成した『徒然草諸抄大成』にも掲載されている「卜部系図」では、兼好の兄である慈遍について「大僧正南朝詔」と書かれているだけであり、『種生伝』でも「大僧正慈遍とて、南朝の御帰依僧なり」とだけ書かれているのに対して、『玉石雑誌』で『神風和記』を挙げ、さらに『桜雲記』の興国元年四月二十七日に書かれている「慈編僧正神風和記三巻ヲ作テ献ズ」という記事によって、「南朝に伺候して、神風和記三巻を記せり」と書いているのは、他の『徒然草』注釈書や『近世兼好伝』よりも、一歩踏み込んだ書き方であると言えよう。たとえば、近世最後の兼好伝『兼好法師伝記考証』(野之口隆正著、一八三七年)は、冒頭で「兼好法師は南朝に心をよせし当時の世捨て人なり」と書いているが、慈遍については、「卜部系図」を

引いて大僧正と注記しているだけである。

『玉石雜誌』では、冒頭の卜部系図と兼好の生年に続く部分は、『種生伝』の「②兼好の人となり」「③小弁との恋の苦悩」をほぼそのまま使っている。けれども、「④萩戸での怪鳥退治」のことは、ここでは省略されている。『玉石雜誌』の他の人物伝では、武勇に優れていることを示すエピソードが多いので、「近世兼好伝」で必ずと言ってよいほど記載される怪鳥退治のことを省略しているのは、やや不審であるが、逆に栗原信充は『種生伝』を使用するにあたって、兼好の恋の顛末を印象づける方針を取っていることに気づかされる。

江戸時代初期に『兼好家集』が出版されたことを背景に、兼好の和歌を巧みに綴り合わせることによって、兼好の生涯を描くことが可能となり、その成果が『種生伝』であった。そのような『種生伝』を大いに活用しているからこそ、『玉石雜誌』における兼好の記事が長大化しているのである。したがって、『玉石雜誌』の兼好記事に、兼好の和歌が非常に多く掲載されていることは一見不可解なようだが、『種生伝』を主な材料として兼好の伝記を記していることがわかること、そのことも納得できる。とは言え、兼好の伝記で、宮廷女房との恋愛の顛末を紹介する分量が多いのは、『玉石雜誌』全体の傾向が、南北朝時代の公卿や武士たちの戦鬪的な激しい生き方を記述していることと比べると、異色である。

『玉石雜誌』はこの後も、『種生伝』に書かれている一連の記述に従って、兼好の人生を紹介している。すなわち、『種生伝』の「⑤恋のゆくえ」「⑥堀河基具の死と延政門院一条との贈答歌」「⑦恋の露見と東下り」「⑧小弁の死と帰京」「⑨後宇多院崩御と兼好の出家」「⑩世の中の変化」「⑪木曾の庵と諸国放浪」「⑫双岡の無常所と徒然草の執筆」「⑬伊賀での終焉」にいたるまで、内容・表現ともにほぼ同じと言ってよい書き方である。このように見てゆくと、『玉石雜誌』が、ただだんに先行する兼好伝を引き写して書いているかのようにも思われてくるのであるが、『玉石雜誌』独自の記述もあることが、次のような箇所からわかる。

すなわち、鎌倉滞在における比企谷での住まいの考証、木曾での兼好旧居の考察、双岡の麓にある長泉寺の兼好塚と兼好の硯などについての考証である。この三点について、次に紹介してみたい。

三 『玉石雜誌』の独自記事

まず最初に鎌倉比企谷での閑居についてであるが、このエピソードは、『種生伝』をはじめ、「近世兼好伝」の中に見当たらず、『玉石雜誌』独自の記事かと思

われる。しかも、この場所の様子が図版で掲載されている(図版1参照)。「種生伝」を絵画化した作品として、東北大学図書館蔵「兼好法師物語巻」(一八〇一年模写)と、金沢文庫蔵「兼好法師行状絵巻」(一八〇七年模写)の二つの絵巻物がある。「種生伝」に比企が谷閑居のこと自体が書かれていないので当然のことであるが、『玉石雜誌』の挿絵は、他の近世兼好伝に類を見ない、独自のものである。

そして、何よりもここで注目されるのは、「比企谷閑居」というのは、栗原信充が、兼好の和歌から、その歌が詠まれた場所を比企谷と特定していることである。その部分を『玉石雜誌』から引用してみよう。以下の引用で、兼好の和歌が書かれている部分までは『種生伝』の「⑦恋の露頭と東下り」にも書かれていることと同じであるが、その後の「鎌倉比企谷妙本寺の境内に」以下の文章が、実地踏査に基づく栗原信充の考察である。

さてこそ都のすま居もまばゆくなりて、東のかたへさまよひけり。旅のかりねの宿の軒より富士の山、いとちかく見ゆ。

都にておもひやられしふじの根を軒ばの岡に出ても見るかな
鎌倉比企谷妙本寺の境内に、琴弾の松といふあり。その松のあるあたりを、軒ばの岡と云よし、彼寺の旧記にみゆ。兼好の歌、此処にてよめるにはあらざるか。(中略) たゞし此琴引松の辺に居たらんには、妙本寺の二代日朗上人在山中のことなるべし。(中略) 余此事を聞て、此地の形勝を問うに、富士の瞻望まことに言語に絶て、兼好の詠歌実景を賦せりとなり。

今引用した、「都にて思ひやられしふじの根を」の歌が詠まれた場所を考察して、比企谷の妙本寺に「軒ばの岡」という名称があり、そのあたりからは富士山が絶景であること、兼好が詠んだ和歌がまさに実景であることを確認している。このようなことは、それまででない実地調査による兼好伝記の考察であり、特筆されよう。ここに名前の挙がっている「日朗」は、『玉石雜誌』巻七に登場する日蓮宗の僧侶である。

『玉石雜誌』ではこの後に、「平貞直朝臣の家にて、人々歌よみけるによめる、古郷はなれぬあらしに道絶て旅寝にかゝる夢の浮はし、人みな涙おとしけり。それより武蔵国金沢といふ処に籠居てけり。」とあるが、このあたりの文章と和歌の掲載は、『種生伝』の「⑦恋の露頭と東下り」の後半部分によって行われている。ただし、それに続けて再び信充の考証が入る。ちなみに、江戸時代に書かれた「近世

兼好伝」のなかで、このように伝記の記事の後に、著者による考証が入るスタイルとして、『玉石雜誌』（天保十四年〔一八四三〕）以前に、先にも触れた、野之口隆正著『兼好法師伝記考証』がある。

さて、栗原信充は、平貞直の家系を述べる過程で平時房に触れて、大仏建立は建長四年（一二五二）で、時房の没年は仁治元年（一二四〇）なので、時房の十三回忌追薦（追善）のために建立したか、と推測している。また、「金沢にては称名寺の院内に住せし由云伝ふれども、院内今は頽破して、其跡定かならず。兼好家集に、武蔵国金沢と云処に、昔住し家のいたう荒たるにとまりて月あかき夜、古郷の浅茅の庭の露の上に床は草葉と宿る月かな、とよめるに依りて思へば、金沢へ来りしこと、両度と見ゆ。」とも書いています。

『種生伝』で「古郷の浅茅の庭の」の歌は、この位置には出さずに、「①木曾の庵と諸国放浪」の所に出ているので、このあたりは栗原信充自身による伝記記述の流れを感じさせる箇所である。また、信充が金沢称名寺での兼好の滞在について、称名寺が荒廢しており、兼好がここに滞在したことの方がよすがとなるような跡は定かでないという書いているのも、信充自身が称名寺を实地検分していることが、「今は頽破して」とあるところからも明らかであろう。

なお、兼好の鎌倉における滞在地については、六浦上行寺とする説も江戸時代にはあったようである。『江戸名所図会』巻之二に、金沢・金沢山称名寺・金沢文庫の旧址・六浦山上行寺などの項目に交じって、「兼好法師閑居の旧址」「甲香」があるのが目に止まる。けれども、残念ながら兼好の閑居について『江戸名所図会』には、「その地、いましるべからず」とあり、『玉石雜誌』にも引用されていた、『兼好家集』の和歌と詞書が記されているだけである。ただし、「甲香」については、「これは金沢の名産なり。兼好法師の『徒然草』に」という書き出しで、『徒然草』の甲香の段を引用し、林羅山の『野槌』に、「いま金沢にて尋ぬれば、ばいといひ、また、つぶともいふ」とあり」と引用している。林羅山が武蔵国金沢を訪れて、羅山も兼好のように、土地の人に貝の名前を尋ねているのが面白い。林羅山は漢詩集『丙辰紀行』（二六一年）の中で、「境到空しく留む金沢の名を」と詠んでいるので、金沢を訪れている。

以上見てきたような、兼好の閑居に関する栗原信充の実証精神は、他の箇所でも発揮されている。それは、兼好の木曾逗留に関する考察である。『兼好家集』に「おもひたつ木曾の麻衣あさくのみ染てやむべき袖の色かは」という歌がある。詞書には「世をのがれて、木曾路といふところを過ぎしに」とある。この歌は、詞書が「世をのがれて木曾路といふところを過ぎ侍るとて」と多少異なる

が、『風雅和歌集』雑下に入集している。そしてこの歌ともう一首、「こ、もまた浮世なりけりよそながらおもひしま、の山ざともがな」（『兼好家集』では初句が「住めばまた」という兼好の歌を使って、『吉野拾遺』に、兼好が木曾で庵を結んで暮らしていたが、国守が鷹狩りにやって来たので、そこから立ち去って、諸国を放浪したという話が出ている。この兼好の木曾滞在説話は、近世兼好伝で必ずと言ってよいほど使われているエピソードである。信充はこの話の実否を、確かめている。すなわち、『玉石雜誌』で兼好木曾閑居について、次のように述べている。

木曾名所図会に、兼好法師菴室の跡は、霧原山の中に猿猴屋敷と称するあり。兼好と猿猴と音便通ずるより、山中の物訛まりしを、今はまた猿屋敷と呼ぶと見ゆ。余木曾路を経徊せしこと八度、落合駅に至りて、霧原山を東北の方二里許に見る。駅長に兼好法師のことを問ふ。むかしは落合より霧原山にかゝり、御坂にいたる。即大井駅の千駄林に出る道これと云。其間に兼好法師の宅地あり、今は田圃となりて、むなく兼好菴の字をのこすと云。猿猴屋敷とおなじきにや否をしらず。

ここで信充は、自分は木曾路を八回往復したと述べているから、驚くほどの行動範囲である。また、「駅長に兼好法師のことを問ふ」とあるように、実際に現地で、自分の疑問を土地の人に質問している点も、注目される。

さて、『玉石雜誌』の兼好伝の大詰めやはり、『種生伝』の最終部である「⑫双岡の無常所と徒然草の執筆」「⑬伊賀での終焉」に拠っている。ところで、「近世兼好伝」の記述では、『園太暦』所載とされて江戸時代に流布していた、兼好が晩年を伊賀で過ごし、伊賀で歿したという説を書くのがほとんどである。その際に、『兼好家集』の「契をくはなとならびの岡のへにあはれいく代の春をすぐさむ」という歌の詞書が「ならびの岡に無常所まうけてかたはらに桜をうへさすとて」とあるので、兼好の墓所は双岡にあったと考えられる一方で、『園太暦』にある伊賀終焉説と、どのように折り合いを付けるかが、ハードルとなっている。

『種生伝』では、木曾在住とそこから退去に続く諸国放浪の中に、「ゆきゆきてむさしの金沢にいたりぬ。むかし住みける家の、いたうあれたるにとまりて、月あかき夜、／古さとのあさじの庭の露の上にとこは草葉とやどる月かな」を入れ、その次に、鹿島神宮参詣歌の「春日の露にぞうつる東路の道の果てより出

し月影」を配置し、その後、さらに西海までさすったことを書き、その締め括りに「世の中をわたりくらべて今ぞしるあはのなるとは波風もなし」を置いている。この歌は、林羅山が著した『徒然草』の注釈書『野槌』で、ある人から兼好の歌として聞いたという断り書きとともに紹介されている教訓的な和歌である。江戸時代には、兼好の和歌として流布して、人々によく知られていた。『徒然草絵抄』の冒頭でも、草庵で閑居する僧体の兼好像に添えられている歌である（図版2参照）。けれども、栗原信充は、多くを『種生伝』によっているにもかかわらず、この歌は兼好の伝記の中で触れていない。

『玉石雜誌』では、鹿島神宮で詠んだ歌の後は、「それよりまた、都路に赴き後に、西の海の果迄見巡り、都に帰り、仁和寺の辺ならびの岡と云処に、無常処まうけてかたはらに桜を植て、／ちぎりおく花とならびの岡のへにあはれいくよの春をすぐさん」の歌を挙げている。それに続けて、信充は「今木辻の長泉寺に兼好塚あり。山城名勝志に、もと二の岡の西にありしを、近世岡の東長泉寺に移すと云へば、寿志をそのままに引移せしにやと思はるれど、その塔を見れば古きものとも見えず」と書いている。信充が「双岡の長泉寺」ではなく、「木辻の長泉寺」という言い方をしているのが珍しい。「二の岡」というのは、双岡は三つの岡の集合体であり、東側から順に、一の岡、二の岡、三の岡と呼ばれる。『山城名勝志』には「兼好塚」つまり、兼好の墓所を示す石塔は、もともと西の岡の西側にあったのだがそれを、二の岡の東にある長泉寺に移したのであるという記事が書かれていたので、信充は、こう書かれているからには、「寿志」、すなわち、ここでは『兼好家集』の詞書にあるように、「ならびの岡に無常所まうけてかたはらに桜をうへさすとて」という兼好の生前の遺志のことを指しているのだが、それならばこそ、「寿志をそのままに引移せしにやと思はるれど」という言葉も出てくるわけで、信充は、長泉寺の兼好の石塔を実見し、「その塔を見れば古きものとも見えず」という感想を書いている。

ここでも信充は、「軒端の岡」からの富士山の眺望を詠んだ兼好の歌を、比企が谷と推測し特定したように、木曾の兼好旧跡を实地探訪して、地元の人から話を聞いたことを書き記している。長泉寺にある「兼好の石塔」は、実見から、後世のものであると考証しているのである。けれども、信充の長泉寺調査は、兼好に関する二つの資料を紹介したことによって、意義ある調査となった。

最後に、京都の長泉寺蔵として、『玉石雜誌』で紹介されている資料について触れたい。図版は、架蔵の『玉石雜誌』からの複写である。

『徒然草』は江戸時代に人気の高かった古典であるので、その著者である兼好

の肖像画も多い¹⁰。ただし、この長泉寺蔵の兼好像は、他の肖像画と比べて、兼好であることを特定する付属品、すなわち美術用語で言う所の「アトリビュート」に欠けているのが難点ではないだろうか。兼好の肖像画は、「読書図」または「執筆図」であつてこそ、そこに描かれた人物が兼好であるとわかるのである。読書姿ならば、「一人、燈火の下に文を広げて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰む業なる」という、『徒然草』第十三段を描いており、描かれた人物は取りも直さず兼好その人ということになる。また、執筆姿ならば「徒然なるままだに、日暮らし、硯に向かひて」という、『徒然草』の序段を絵画化している。つまり、兼好のアトリビュートは、書物、燈火、机、紙、筆、硯などであるということになる。

ところが、『玉石雜誌』に掲載されている、双岡長泉寺蔵「兼好法師寿像」（寿像は、生前に作っておく像）は、中年の僧侶姿で表情は穏やかで優しげであるが、上記のアトリビュートが描かれていない。強いて探せば、画面の向かって左側に見えるのが、数冊の書物であろうか（図版3参照）。

長泉寺蔵として、もう一つ掲載されているのが、「兼好遺愛硯」である。兼好の硯というのも、この『玉石雜誌』掲載図以外には管見に入っていない。けれども、先ほどの兼好寿像にアトリビュートが欠けていることをまるで補うかのようになり、ほかならぬ「硯」の図が出ているのは、やはり「徒然なるままだに、日暮らし、硯に向かひて」という、序段の余響であろう。それにしても、この硯の模様になっているのは、何の動物だろうか。『徒然草』には狐のことならば二つの段に出てくるが、狐ではなく狸のように見えるのだが（図版4参照）。

四 『玉石雜誌』の兼好伝に見る栗原信充の執筆態度

『玉石雜誌』に書かれた兼好伝の終焉部分と、その後書かれているまとめの記述から窺われる、栗原信充の執筆態度について考えてみたい。兼好は最晩年に京都から伊賀に移り住み、そこで終焉を迎えたというのは、『種生伝』に拠っている。観応元年二月十五日に没したこと、その少し前に、天皇から薬を託された和氣清元が来訪したが、兼好はそれを辞退したこと、また、都から二条殿下（二条良基）が密かに伊賀に下向して兼好と語り合ったことや、没後庵に残っていた、教典や書物のこと、兼好に仕えていた命松丸が、後日、二条良基を訪ねて、兼好の「有とだに人にしられぬ身のほどやみそかに近きあけぼの月」という和歌を伝えたことなど、すべて『種生伝』によって書いているが、これらの事跡

は、そもそも江戸時代に流布していた『園太暦』所載という創作的な兼好伝記によるものであり、『種生伝』もそれらを撰取していることから、このような記述になっているのである。この「有とだに」の歌は、『種生伝』における掲載歌の最後のものである。栗原信充は、ここまで兼好の伝記を書いてきたうえで、『平安の篠田厚敬が種生伝を主とし、其他諸書に参考して要をとる』と明記している。

この後にさらに続く兼好の伝記記事の最終部には、栗原信充の考察が書かれている。ここでは、直前までの兼好終焉記事を承けて、北畠親房の『伊賀国記』に書かれている当該記事を引用して、「園太暦と同じければ、伊賀国にて円寂にすることは正しき説なるべし」と結論付けた。さらに、『徒然草古今抄』には、兼好の生没年が、弘安五年、没年が観応元年四月八日、六十八歳であり、高野山の西光院に今も位牌があるという説を紹介している。また、『徒然草参考抄』の「叡山の麓西教寺に兼好の位牌ありと云。また墓は双岡にあるよしなれど、今は処のものもしらずと云。」という文章も引用して、割注で、「此抄の作者浄福寺の恵空和尚は、長泉寺の墓をしらざるにはあるべからず。近世好事の士の立し処なれば、かくは記せしなるべし。」という信充自身の考証を書いている。『徒然草古今抄』や『徒然草参考抄（徒然草参考）』に書かれている記事に対して、疑義を呈しているのである。また、『貞徳抄』に引用されている正徹の『徹書記（正徹物語）』を挙げて、「官滝口にてありければ」という部分に、信充は次のような割注を付けている。「職原抄に、滝口は藏人所の属なり。六位侍の武勇に堪たる輩、これに補すと見えたり。」そこからの繋がりで、ここまでの記述では引用していなかった、兼好が怪鳥退治をした武勇伝を引用している。思うに『種生伝』では小弁への恋の場面にこの怪鳥退治が出ているので、それはそぐわないとして省略したが、兼好の官位の考証にからめて、この武勇伝を書き入れたのであろう。この怪鳥退治は「近世兼好伝」で好まれる話であるが、それ以上に有名なものは、『太平記』に出てくる兼好の艶書代筆である。すなわち、高師直が塩冶判官の妻に艶書を送ろうとして兼好に代筆させたが、その手紙は見向きもされず、失敗に終わったという話である。信充はこの話に対する『本朝歴史』や『扶桑隠逸伝』の兼好評を引用しつつも、この頃兼好は伊賀の国見山の麓に庵を結んでいたもので、『太平記』の記事は「大に疑うべし」と書いている。年代が合わないというのである。当時信じられていた兼好伝記に照らし合わせた、ある意味で合理的な考証である。さらに、信充は、他の「近世兼好伝」に見られない解釈として、『鎌倉成氏年中行事』に、正月九日が初子日に当たる時は、「見好法師」という法

師が家々に祝言を言いに来るといふ風習を紹介して、「根松」と「寝待」を通わして、兼好が艶書を代筆した話を作ったのではないかと考証している。さらに念を押して、割注も付けて、ここでは『太平記』の二十一巻には「兼好と云る能書の遁世者とありて、吉田とも卜部ともなければ、初子の見好と見ても殊なる難なし」とまで書いている。栗原信充は、自分のこの新説にかなり自信を持っていたようである。

以上のように兼好伝記における諸説は、生没年や京都双岡の墓所と伊賀国の国見山の麓の庵のこと、さらに『太平記』に書かれている兼好の艶書代筆など、さまざまな論点があり、それらに対してどの説を採るかと言うのが栗原信充の考え所であったろう。その時、おそらく信充は『種生伝』に書かれている兼好の伝記にもっとも共感して、『種生伝』を主要な依拠資料としたのであろう。『種生伝』は『兼好家集』を大いに活用して、兼好の生涯を一編の物語として描いているので、信充のような歴史上の出来事や人物に造詣が深い有職故実家が、依拠資料としているのは、やや意外であるようにも思われるが、信充としては割注や考証によつて十分に自分の考えを披瀝しているし、また他の兼好伝作者と比べると、兼好ゆかりの場所を実見し、土地の人々から話を聞いたり、地元資料を提供してもらったりもしている。この点を、信充の態度として特筆したい。

さて、艶書代筆に対する自分の見解を述べたことに続いて、『徒然草』の執筆場所にも触れている。古くは『徒然草』が上下二巻で伝来していたことと結びあわせて、江戸時代の兼好伝では、『徒然草』の前半部である上巻を双岡の庵室で書き、後半の下巻を伊賀の庵室で書いたとする。『玉石雜誌』もこの説を採っているのは、他の兼好伝と同様であるが、そのことを書くにあたり、「土肥経平の説の如く」と述べて、ここで土肥経平の名前を出していることが注目される。

というのも、栗原信充（一七九四―一八七〇）から見て、九十年前の有職故実家・土肥経平（一七〇四―一七八二）が『春湊浪話』（安永四年（一七七五）自跋）で述べている「兼好南朝忠臣説」のことは、『玉石雜誌』（一八四三年刊）の中で触れていないからである。これに対して野之口隆正の『兼好法師伝記考証』（一八三七年刊）では、土肥経平の「兼好南朝忠臣説」を全面的に取り入れている。

時代は幕末に近づき、尊皇攘夷の思潮が急激に高まっていた時期である。けれども、そのような時代の潮流の中で、信充が後醍醐天皇とその忠臣たちの人物像や戦の勝敗を詳しく書いているこの『玉石雜誌』に、なぜ兼好忠臣説を前面に出さなかったのであろうか。土肥経平の名前を出しておきながら、この後には、江

戸時代に著された主な『徒然草』注釈書を、『寿命院抄』から『諸抄大成』や各務支考の『徒然草の讚』まで、都合十六種類も列挙している。さらにその後には、寛永三年に出版された『兼好法師家集』の構成方針を書いた、「家集事」を全文紹介して、さらに和歌四天王の代表歌を一首ずつ挙げて締め括っているのである。

兼好の伝記記事の最後を『兼好法師家集』と和歌四天王の和歌で締め括ったところに、信充の兼好に対する人物評が凝縮している。信充にとって兼好は、南朝方の忠臣として活躍する姿ではなく、王朝的な悲恋の主人公として、また、諸国を放浪行脚する歌人としてイメージされていたことを物語るのが、これらの最終部分の記事であると思えてくる。兼好と頼阿が粥の炊き出しをして困窮し飢えた人々に振る舞ったという、「近世兼好伝」のいわば定番のエピソードは、『種生伝』にも出ているが、このような話も信充は省略しているのである。信充は兼好の事跡にかかわる数多くの書物を取捨選択しながら、兼好の足跡を実地に調査し、長泉寺に所蔵されていた兼好の肖像画や遺愛の硯の絵も紹介したが、江戸時代における一連の「近世兼好伝」と、明らかに一線を画している。兼好の和歌を綴り合わせて物語風に兼好の人生を描き出した『種生伝』を主たる参考書とし、最終記事を『兼好家集』と和歌四天王の四首の歌で締め括った栗原信充は、自分自身の兼好像を描き出していると、理解したい。

五 おわりに

『玉石雜誌』における兼好伝の位相を中心に見てきたが、最後に肖像付き伝記集である『扶桑隱逸伝』『前賢故実』、および近代の『徒然草』研究における『玉石雜誌』の撰取について概観したい。

『扶桑隱逸伝』は、寛文四年（一六六四）に、元政（一六二三—一六六八）がまとめた漢文体の隱遁列伝で、三巻三冊からなる。元政は京都の深草に庵を結んで隠栖していたので、「深草の元政」「深草上人」などと呼ばれた学僧であり、漢詩人である。

元政は自序の中で、「始（もと）ヨリ縹素ヲ論ゼズ。凡ソ逸迹有ル者皆ナ之ヲ取ム。蓋シ大法東漸之土、高キ者ハ多ク僧ト為ル。是ノ故ニ素服尤モ少シナリ」と述べているように、「逸迹有ル者」すなわち隠遁した人々は皆この伝記集に収めたが、仏法が伝来した日本において、徳や志が高い人は多くは僧侶となるので、「縹素ヲ論ゼズ」つまり、僧侶と俗人を区別したわけではないが、「素服」す

なわち俗人は少なくなつたのであると言う。

『扶桑隱逸伝』の序文でもう一つ注目されるのは、その末尾近くで、「是二於テ乎又児童ノ輩ニ與ヘテ啼キヲ止ント欲シテ、以テ其ノ図ヲ画イテ、而其ノ趣ヲ示ス」という箇所である。つまり、図画を付けたのは、子どもが興味を持つて読めるように配慮したというのである。『扶桑隱逸伝』は肖像画が付いているが、それらはたとえ、人物の姿だけを描くものではなく、住まいである庵の様子や、室内の調度や庭の植栽、また場合によっては周囲の自然などの中に、人物を描いている。そのような画面を興味深く眺めるのは、子どもに限るわけではなく、大人も十分に楽しめるし、一目でその人物の暮らしぶりが彷彿とし、ひいては人柄を映し出すものとなっている。なお、子どものための挿絵という考え方は、『玉石雜誌』の序文にもあったが、そこでもやはり、大人にも視覚的に訴えるねらいがあったろう。また、『玉石雜誌』では、肖像画とその人物にかかわる種々の「史料」とも言うべき図版を豊富に入れていることが、独自のスタイルとして、特徴付けられる。

『扶桑隱逸伝』での兼好画像は、『徒然草』第十三段の「一人、燈火の下に文を広げて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなく慰む業なる」を、そのまま絵画化したような描き方であるが、庭の松や枝折り戸や垣根も書かれている。背景は余白になっていて、その場所が、山里なのか特定してないし、屋根も吹き抜け図法なので、草庵暮らしという印象は受けない。ただし兼好の姿は墨染め衣である（図版5参照）。

『玉石雜誌』がその多くを扱っていた『種生伝』と比べて、『扶桑隱逸伝』はそれよりも五十年前のものである。『扶桑隱逸伝』の記述自体は簡略であるが、江戸時代の兼好伝記の原型となっている。兼好は卜部兼頭の子で、きわめて博覧であり、和語をよく綴り、和歌を作り、時論、すなわち時事論を論ずるに際しては、少し俳体、つまり俳味があるというのは、おそらく兼好の物の見方が融通無碍であることを指すのであろう。後宇多天皇が崩御されると出家して修学院に入り、後に横川で隠遁したこと、兼好は清貧な暮らしぶりだったので、米と錢を援助して欲しいと言う和歌のやりとりを頼阿としたことなど兼好の交友圏に触れ、そこから、清閑寺の道我や高師直などは、皆、和歌の友人で、師直から艶書の代筆を頼まれた時も、拘らずに代筆したのだという、元政自身の見解を示した。元政は「贊」で、兼好の人物像を、友人に対しては拘泥せず、見知らぬ人間の非礼な態度に対しては、凜とした厳しい態度を取ったとして賞賛している。

『扶桑隱逸伝』に『徒然草』に登場する人物が入っていることも注目される。

『扶桑隱逸伝』下巻に見える心戒(第四十九段)、盛親(第六十段)、平惟継(第八十六段)のように、『徒然草』を人物史料として活用している。このようなことは、『玉石雜誌』にも言える。巻第七に登場する豊原龍秋は「龍秋、累世ノ伶人トシテ鳳管(原文にルビ(へしやうのふゑ))ハ其家の芸なれば云に及ばず」と本文にあるように、笙を家業とする楽家である(図版6参照)。「玉石雜誌」には龍秋が、花園・後醍醐・光厳・光明・崇光・後光厳の六代に仕え、また足利尊氏や四条大納言隆資、洞院実夏、また、豊原家の人々や弟子たちなど、天皇や公卿、武将など当時の主立った人々に笙の大曲を相伝したと書かれている。四条大納言隆資から兼好が直接聞いた、横笛に関する豊原龍秋の考えが『徒然草』第二百十八段に詳しく書かれており、その部分を栗原信充はほぼ同文で、『玉石雜誌』に引用している。ただし、その部分が『徒然草』からの引用とは明記していない。『玉石雜誌』で豊原龍秋を取り上げたのは、龍秋が、当時の天皇・公卿・武士たちに笙の伝授を通して幅広くかかわった人物だったことが、大きな要因だったのだろう。それらひとりひとりの家系を書いているので、龍秋の項は七丁あり、充実した記述となった。つまり、龍秋が『玉石雜誌』に登場するのは、音楽を通して、当時の公武の人脈の広がりを見渡し、それらの人々の経歴にも触れるという要素が大きかったからではないか。たとえば、洞院実夏の名前を出したところで、実夏の兄の実世は南朝方に付き、実夏は北朝方に付いたことを、割注で「信充私云(へそかにいふ)」と断ったうえで、「兄弟相分れて両朝に拝趨せらるゝものは、運を両端に計りて家系を無窮に繁昌せしめらるべき籌索としられたり」と書いている。「籌策」すなわち「はかりごと」と書いているのは、「信充私云」と響かせれば、洞院家の処世術を批判していることになろうか。

このように、龍秋を取り上げると広がりのある記述が出来るわけで、『徒然草』に龍秋が出てくるので、注目したというわけではないだろう。けれども、『徒然草』第二百十八段が、藤原隆資の話として語られることは、隆資が南朝方の忠臣であり、最後は戦死した人物であることなどを思い合わせれば、『徒然草』第二百十八段は音楽に対する芸道論がこの段の主眼であるとは言え、その後後に動乱の時代の広がりや垣間見る思いがする。『玉石雜誌』を通して、『徒然草』の背後に、改めて歴史の実情が感じられてくる。

『前賢故実』は、菊池容斎が絵と文を書いた列伝である。『前賢故実』で取り上げられている松下禅尼の伝記は、『徒然草』第百八十四段によって描かれている障子の切り貼りのエピソードを禅尼の肖像画として描いた(図版7参照)。北条時頼の肖像画は、『徒然草』第二百十五段の味噌を肴に酒を飲んだ話の場面

(図版8参照)を描いている。そして、兼好の伝記記事は簡略だが、兼好が読書人であること、諸国を歴遊した後、京都で歿したことを書き、ここには『種生伝』に書かれ、『玉石雜誌』に受け継がれた兼好の経歴は書かれていない。肖像画は、灯火の下で読書する姿である。ただし、頭を垂れているポーズは珍しい。(図版9参照)

けれども、近代になると、沼波瓊音の『徒然草講話』(修文館、大正十三年初版、昭和十二年十一版)の、末尾に置かれた「兼好法師」という解説文には、兼好の兄の慈遍について、「南朝に伺候した人で、興国元年に神風和記三巻を撰進した」とある。『玉石雜誌』の書名も挙げて、「見好法師」という法師の存在のことも引いているが、瓊音は流石にこの説には同調していない。けれども、この『徒然草講話』の内表紙には、『玉石雜誌』に掲載されている長泉寺蔵の「兼好の硯」がデザインとして使われている。外側の表紙の上部に、硯の模様になっている動物が描かれている。近代の『徒然草』研究に及ぼした、『玉石雜誌』の影響を見る思いがする。

さて、『玉石雜誌』に登場する南北朝時代の著名な公卿や武将たちは、皆一様に激しい時代の渦に巻き込まれ、あるいはみずから飛び込んで、生死を分かたつ戦闘に散っていった人々であった。『玉石雜誌』における彼らの伝記には、一族郎党のことも書かれ、技芸を持つ刀工や楽人や頓阿のような歌人であっても、師弟関係や子孫のことが詳述されている。いわば、それらの記述は、強い人間関係の中で的人生が描かれていると言つてよい。けれども、兼好の場合はどうだったろうか。

ひとり兼好は、憂き世の波に呑み込まれることなく、生涯を送つたと言つてよい人物だった。

この現実の世の中というのは、兼好の場合、まさに『玉石雜誌』の世界である。この現実をどう生きるか、人生の目標や基盤は何処に置いたらよいのか。つれづれなるままに、みずからの心の中に浮かんで消え消えては浮かぶさまざまな思索は、現実の時代の抗争には触れずして、しかも、時代の波間に埋没することがなかった。

注

(1) 続編は山本勘助(巻第二)、細川澄元(巻第二)、日置正次と藤原房繁(巻第三)、真田幸村(巻第四、上下二冊)、北条早雲(巻第五)の六人の戦国武将の伝記である。

続編もそれぞれに肖像画が付き、その他に武具や旅装束や地図など図版が豊富である。続編には公卿や歌人などは掲載されず、兼好伝と関連する記事もないので、本編で取り上げるのは正編に限った。

(2) 山本北山による『燕石雜志』の序文では、「人の捨てて顧みざる所、我取りて珍とするの意なり」とある。北山は、他の人なら打ち捨てて置く「燕石」のように、価値がなくどうでもよいことを馬琴が心に留めて、興味をもっていろいろと考証したりする知的好奇心をよしとして、このように書いたのだろう。馬琴自身は、「概略」の末尾で、「抱玉而有罪。われ玉を扱まず。独嘉して燕石を抱くもは罪なからんが爲也」と書き、「玉を選別せずに、燕石を愛翫して楽しむ分には、罪にならない」と述べている。「燕石」に謙遜の意を籠めたわけではなく、むしろ独嘉 すなわち自分一人で結構な思いにふけるのを楽しみとしている。

(3) 「醜齷」という言葉は、余り見かけない言葉だが、森鷗外の漢詩に使われている。「鷗外漢詩「醜齷」については、『鷗外全集』第十九卷（岩波書店）、『鷗外歴史文学集』第十三卷（岩波書店、二〇〇一年、注釈・古田島洋介）、小泉浩一郎「傍観者からの脱出劇 文学の新領域、鷗外史伝」（別冊太陽「森鷗外 近代文学の傑人」、平凡社、二〇一二年）など参照。なお、栗原信充と森鷗外には直接の繋がりはないが、加藤雄吉（一八七三—一九一八、鹿兒島生まれの考証家）を介在させると、間接的な繋がりが見えてくる。すなわち、加藤雄吉は、若い頃江戸で栗原信充に師事して、有職故実や軍学を修め、島津久光の意を受けた信充の鹿兒島下向に、付き添った人物である。雄吉の著作『尾花集』に掲載されている栗原信充に関する記事は、信充の孫にも問いつけ合わせるなど、行き届いた記述である。加藤雄吉の名前は、『薩州名家伝』の著者と合わせて、鷗外の史伝『北条霞亭』（一九二一年）に出てくるだけでなく、日露戦争に出征した鷗外と雄吉の間で和歌の贈答があり、さらには、加藤雄吉から、余命幾ばくもないという手紙を受け取った鷗外が、痛切な驚きと励ましを記した漢詩がある。この

鷗外の漢詩は、同じ著述家として、雄吉に対する真情が迸り、人間鷗外の情感が強く深く感じられる。

(4) 『桜雲記』は、後醍醐天皇の即位から後南朝の滅亡までを、編年体で記した歴史書。著者は未詳だが、浅羽盛儀（江戸幕府の書物奉行）とする説もある。成立は十七世紀半ば頃か。以上は、安井久善編『浪合記・桜雲記』（古典文庫、第四八二冊、解説・安井久善、一九八六年）を参照した。

(5) 江戸時代に木版印刷によるさまざまな書物が出版されるようになって、その中でも『徒然草』の人氣が高まり、『徒然草』の原文の出版だけでなく、注釈書も次々に刊行された。各種の注釈書を集大成した『徒然草諸抄大成』（一六八八年）が出版された頃からの新しい傾向として、『徒然草』の著者である兼好の伝記が書かれるようになる。兼好の伝記と言っても、兼好に関する史実はほとんど知られていないので、現代の眼から見れば創作的な伝記である。わたしはそれらを「近世兼好伝」と総称している。

(6) 引用は、注4書による。

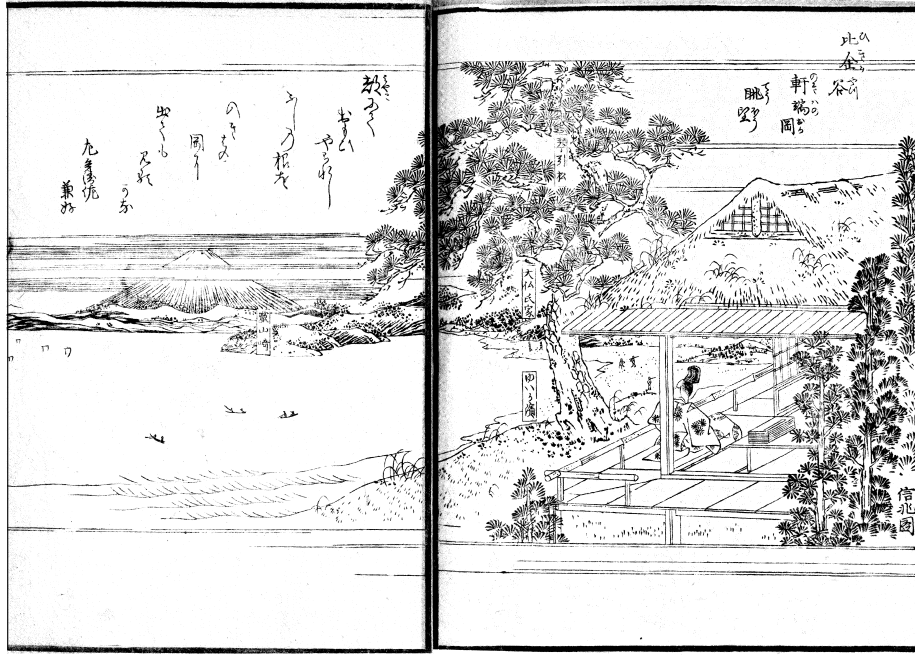
(7) 拙著『徒然草の変貌』（ベリかん社、一九九二年）所収の『兼好法師伝記考証』概説」で、この著作の特徴を述べた。

(8) 注7書「兼好伝説とその展開」参照。金沢文庫蔵の絵巻は、特別展図録『兼好と徒然草』（編集・発行神奈川県立金沢文庫、一九九四年）に、全巻が掲載されており、参考になる。

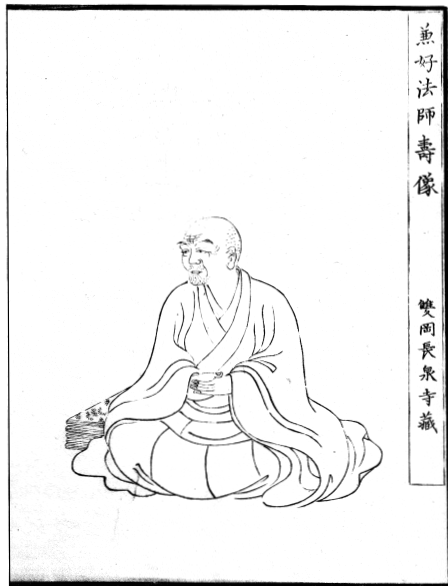
(9) 『新訂江戸名所図絵』巻之二（市古夏生・鈴木健一校訂、ちくま学芸文庫、一九九六年）参照。

(10) 拙著『兼好』（ミネルヴァ日本評伝選、ミネルヴァ書房、二〇〇五年）の第三章「1 兼好の肖像画」参照。

（二〇一九年十月三十日受理）



〔図版1〕『玉石雑誌』より（架蔵）



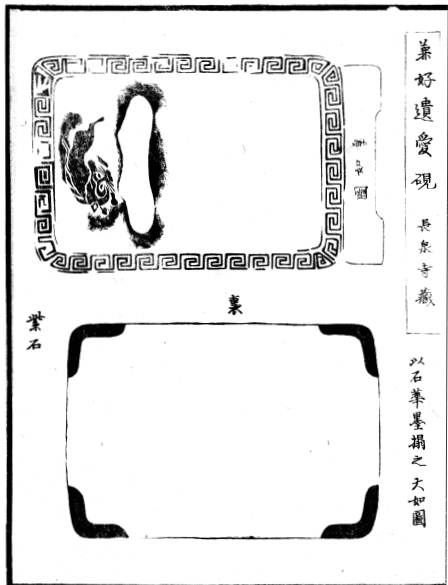
兼好法師壽像

雙岡衆衆寺藏

〔図版3〕『玉石雑誌』より（架蔵）



〔図版2〕『徒然草絵抄』より（架蔵）



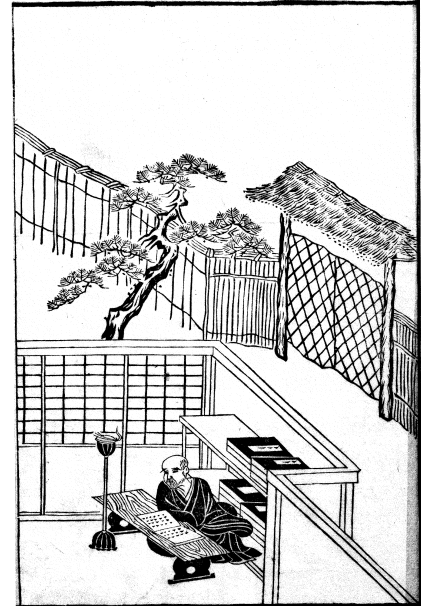
兼好遺愛硯 長衆寺藏

以石筆墨搦之天如圖

〔図版4〕『玉石雑誌』より（架蔵）



〔図版6〕 『玉石雜誌』より（架蔵）



〔図版5〕 『扶桑隱逸伝』より（架蔵）



〔図版8〕 『前賢故実』より（架蔵）



〔図版7〕 『前賢故実』より（架蔵）



〔図版9〕 『前賢故実』より（架蔵）

卜部兼好神祇大副兼茂曾孫也。居吉田。兼好幼
 聰悟。好讀。老莊書。有文字。善和歌。兼工書。任
 今多奈任左兵衛尉。稍被親昵。及一帝崩。兼好
 髮入侍學院。常謂曰。燈下讀書。猶文。古人樂莫
 後。庶遊諸國。終京師。亦著有徒然草。

A Study of *Senshin Shuzo Gyokuseki Zassi*
—discussed around its biographical references to Kenko—

Yuko SHIMAUCHI

ABSTRACT

Senshin Shuzo Gyokuseki Zassi (先進繡像玉石雜誌) is a book of biographies and portraits published in 1843. Its author, Kurihara Nobumitsu (栗原信充, 1794-1870), was a scholar of the later Edo era, who had a thorough knowledge of ceremonial and ritual customs of the imperial court and Samurai families.

The main part of this book consists of nine volumes which take up twenty four persons from Kitabatake Chikafusa (北畠親房) to Fujiwarano Tameko (藤原為子) as their subjects. It contains not only portraits of each person but also abundant pictures representing their favorite domestic articles, strips and square pieces of fancy paper, places related with them, battles they fought etc..

Most of the persons dealt there are noblemen and warriors who directly participated in the violent political change in the Nanboku-cho (南北朝) period. This dissertation focuses on the fact that we find Kenko (兼好), the author of *Tsurezuregusa* (徒然草), among them. We approach this problem from these two view-points.

Firstly, why are no less pages devoted to Kenko, a literary man who never played a remarkable part in the political scenes, than to the other eminent historical figures?

Secondly, we find portraits and brief life stories of Kenko in other books of similar style published in Edo era ; for example, *Fusou In'itsuden* (扶桑隱逸伝) and *Zenken Kojitsu* (前賢故実). If we compare Kurihara Nobumitsu's evaluation and portrayal of Kenko with those of other books, what characteristics can be pointed out in the former?

We observe that Kurihara Nobumitsu used as well as epitomized imaginary life stories of Kenko written in the Edo era ; and that Kurihara Nobumitsu's evaluation of Kenko had influences on those of the people of Meiji and Taisho periods.

Hitherto some studies of *Tsurezuregusa* and Kenko have mentioned *Senshin Shuzo Gyokuseki Zassi* as a source of pictures but none has minutely examined its biographical references to Kenko. To do that is the particular feature of this dissertation.